
箱庭

藤臣 阿古夜

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

箱庭

【Nコード】

N7243M

【作者名】

藤臣 阿古夜

【あらすじ】

仕事帰りに乗る最終電車。

夏木裕子はいつも通り帰宅までの時間を過ごしていた。

膝の上には雑誌、そして缶ビールを片手にもつ裕子はその最終電車が異次元への入り口だとは知るすべもない。

なんら変わることのない街は、なにかが違っていた。

はたして裕子はそこから脱出出来るのか？そして隠された真実とは…。

プロローグ

人が疎らなホームで待つこと数分。その日の最終電車へ急行あさひ
《が滑り込んできた。

六両編成のこの電車は、進行方向とは逆の六両目が喫煙席となっている。

夏木裕子は車両を表すランプの下へと歩を進めた。

ふと見るとベンチには、缶コーヒーを片手に雑誌を読むサラリーマンや半分夢の世界に入りかけている男性が座っている。

立ち上がる様子がないことから、各駅停車の始発に乗ることが予想された。

始発まで二時間をきっている。それまでそうして過ごすのだろう。

裕子は視線をドアに向けると、誰も降りてこないことを確認して車内に身を滑らせた。

喫煙車両の自動ドアが開くと、煙草とアルコールの臭気が裕子を迎えた。

喫煙者といえども、この空気にはなかなか慣れることはできない。

鼻をひくつかせ車内を見回す。入り口近くの席が空いていることを確認した裕子は、ボストンバッグを棚に乗せ座席に身を沈めた。

後ろに乗客がいないことを確認して座席を倒すと、裕子はハンドバッグのなかからおもむろに煙草を取り出し火をつけた。

車内の臭いは苦手だったが、店を出てからこのかた煙にありついていない。

いまではタクシーでも禁煙になっている。

店からタクシーで二十分。そこから構内のコンビニにて買い物を済ませいまに至っているわけだが、禁煙ブームはなにもタクシーや構内だけではない。煙草を吸う利用者が少なくなった店内では、ホステスは禁煙になっていた。

どちらかと言えば、和気あいあいとした雰囲気のスナックであった

が、常客がやめていくなかホステスが喫煙をするわけにはいかない。

暇な時間ならば、こっそり裏口で吸うことも可能だが、今日は日曜日にも関わらず大繁盛だった。

夕方に開店してからはそんな暇もなく、裕子はため息とともに紫煙を吐き出した。

裕子が隣の繁華街で働くようになって、そろそろ半年になる。

最初は地元で働いていたが、狭い田舎町である。依然保守的な町では、なにかと人の噂にも上りやすい。

火曜から木曜までは昼のバイトである本屋、木曜から日曜日までは隣のバイトというシフトをとっている。

本屋のバイトは高校時代からと二十三歳になる裕子には長い。

スナックのマネージャーからは、辞めて引越してはどうかという提案もあったが、老夫婦の営む本屋にも愛着があった裕子は、週末は店の寮で寝泊まりして帰る、といった手段をとっていた。

なによりも本好きな裕子にとって、本屋のバイトは楽しい時間でもある。

新刊もいち早く手に入れることもできる上、老夫婦も本屋を営むだけあって知識も豊富で、いろんな作家の話やお勧めを聞くのも楽しみであった。

毎週日曜日の最終電車に乗って帰宅するわけだが、裕子は疲れながらも満足していた。

着実に目標額に達成しようとする通帳を見れば疲れも吹き飛ぶ。

老夫婦の営む本屋の真横の店舗が空いているのだが、なにか商売としてはどうかと提案されている。

マンガ喫茶ほどの規模はなくても、本をゆっくり読みながらコーヒーでも飲む店をしてみたいと思っていた裕子にとって、それはありがたい提案だった。

本の注文も気軽にできる上、なにかと手伝いやすくなる。

両親のいない裕子にとって、老夫婦は家族に近い存在だった。

裕子はゆっくりと吸い終わると、座席に備え付けてある灰皿にねじ込んだ。

自宅の最寄り駅までは約一時間半。

峠をひとつ越える間は、街の街灯を楽しめることもない。

老夫婦の店で購入した雑誌を取り出し、コンビニ袋から缶ビールを取り出した裕子はタブを起こした。

プシュッと軽快な音が響く。タブを押し込みぐいとビールを飲む。

普段も晩酌をする裕子だったが、そう強くもない。

だが、帰りのこの車内で飲むビールは小旅行気分で格別だった。

隣の座席でも晩酌をした後なのか、窓際に空き缶を置いて眠りこける乗客の姿もある。

大きなスーツケースがあることから見ると、出張帰りのようであった。

視線を膝の上の雑誌に向け、ページをめくっていく裕子の目に《ダイエツ特集》という文字が飛び込んだ。

片手で腹の肉を摘んでみた裕子は、そそくさとページをめくっていく。

小説なども好きな裕子だが、週刊誌や漫画本なども好きなため、芸能人についての記述のある本もよく購入している。

缶ビールを片手に読み進めていく裕子は、突然なにかが軋む音にびつくりして顔を上げた。

第一章・名もなき駅

窓の外は薄暗い街灯があるのみで、暗闇に近い。

なんだろう…そう思った瞬間、身体が前につんのめった。

とつさに踏み止まったものの、雑誌は膝の上から滑り落ち、その反動で座席で背中をしたたかに打った。

軽く呻き、落ちた雑誌を拾う。缶は手に握られたままだが、アルミは形を変えていた。こぼれて汚していないことをすばやく確認した裕子に、車内のざわめきが聞こえた。

「いったいなんだ」

「うう…」

そんな声が聞こえてくる。

そんななか通路の向かい側の乗客は勇敢にも目を覚ますことはない。

ときおり口を動かすだけで、この事態に気づく様子はないようだった。緊急停車だろうという呟きが聞こえたが、それについてなんらアナウンスも流れることはなかった。

乗客は思い思いの呟きを口にするのと再び夢の世界へと戻ったようで、車内のざわめきは落ち着いていった。最終電車では駅に着く際のアナウンスも流れることはない。

そのためだろうと思い直した裕子は、握られた缶ビールに視線を移した。

炭酸が抜けただろうビールを口にするのは気が滅入りそうだったが、洗面台まで向かうのも面倒である。

あと一口ばかりのビールを飲み干し、コンビニ袋に入れるとおもむろにハンドバッグから取り出した煙草に火をつけた。

最近この峠では、緊急停車が相次ぐと聞いたことがある。山間部を通るこの線路は、動物が飛び出してきたり落石などがあると聞いていた裕子は、復旧までどのくらいかかるかとため息をついた。

灰を落とそうと視線を横に向けた裕子は、視界の端にぼんやりとしたなにかの輪郭を捕らえた。

なにもない暗闇のなかにぼんやりと浮かぶそれは、小さな建物を形作っている。いったいなんだろう…目を凝らした裕子は、それが小さな駅であることに気づいた。

車内の光とぼんやりとした電灯から、文字がかすかだが読める。

「なにに。名もなき…駅？」

改札口らしい入り口の上には、駅名の書かれた錆びた看板があり、そこにはそう書かれていた。

蔦が覆い、建物は朽ちかけ、まるで廃墟のような風貌に生い茂った草。駅としては機能しているのか。不思議な駅に裕子はひんやりとした空気がうなじを駆け抜けるのを感じた。それはまるで、巷で聞く【出る廃墟】を思い起こさせる。

裕子はぶるぶると首を振って、その思案を打ち消そうとしたとき、この辺りに小さな村があることを思い出した。

日に数えるほどしか停まらない駅だろうから、管理されていないとしてもおかしくはない。だいたい小さな駅では駅員はなく無人のところも多い。

裕子は苦笑した。

いきなりの緊急停車とこの暗闇である。びくついていた自分が可笑しかった。

暗闇のなかに浮かび上がる朽ちかけた駅というのも、なかなか恐怖心をそそるものがある。

そしてあの不気味な駅名はそれにぴったりだった。

灰皿にねじ込んだ裕子は、そういえばと携帯を取り出した。友人にこういう手合いが好きな人物がいる。

報告してあげようと携帯を開くと、メールが受信されていた。

送信者の欄には沙織と載っている。

《件名》

お疲れ様あ

《本文》

もう帰ってる？沙織は今良くんのお店で呑んでるよー。何時頃に乗る予定？あれならウチの家泊まればいいし、一緒に呑まない？明日帰ればいいじゃん。

沙織との付き合いは二ヶ月ほどになる。

アフターをしたとき、その店のホステスをしていた沙織とは知り合ってからちよくちよく呑みに出る仲だった。

終電に間に合うようにしていた裕子だったが、終電に乗り過ごしたときに一度だけ泊まったことがある。

気さくな性格は好感がもてた。

可愛い文面とはうらはらに酒はめっぽう強く、怖い話が好きな沙織はよくそれ関連のテレビを見ることが多い。

【出る廃墟】ではないにしても、沙織が好きそうな駅である。

裕子は返信ボタンを押すと、メールの文章を打ちはじめた。

《件名》

今日はごめんね

《本文》

電車に間に合って今電車のなか。また誘ってね

そういえば、今電車が停まっちゃったんだけど、不思議な駅見つけたよ。多分峠付近だと思うんだけど、名もなき駅って名前で、薦とかあって結構怖い雰囲気なんだよね。各駅停車だと停まれる駅だと思うんだけど、多分沙織は好きそうな感じかな。あたしは勘弁だけど（笑 それじゃ、飲み過ぎないようにね！また来週一緒に呑もう沙織へのメールを送信しようとしたところ、圏外が表示が出た。

ここが峠のどこかと気づいた裕子は、ふとため息をつくと携帯を閉

じた。

山間部では携帯の電波が届かないことがある。

普段ならば、この峠もその先にあるトンネルもすぐ通過するため、支障はなかった。

だが今日は緊急停車とともにいつ復旧するかもわからない。

駅に着いてからでも返信しようと思った裕子は、電車の振動を感じた。

どうも出発するようである。

それに対してのアナウンスもないまま、電車はゆっくりと運転を開始した。

流れる暗闇のなかに、ぼんやりと駅は浮かんでいた。その駅の真横を通過するときに、ぼんやりとしか見ることの出来なかった駅の全貌が浮かび上がった。

駅の構内のなかには外灯に照らされているのみで薄暗い。

朽ちかけたベンチが見えるほかは、がらんどうだった。冷え冷えとした雰囲気は、たとえ近くに民家があったとしても機能している様子はない。

そのうち明滅を始めた外灯は、駅名の書かれた看板を不気味に照らしていた。

建物に覆う蔭に生い茂る草のなかにたたずむ駅は、やがて電車の加速とともに視界から消えていった。

第二章・帰宅

長いトンネルを抜けてしばらくすると、見慣れた街のネオンが視界に映り始めた。

ここまで来ると、自宅までの最寄り駅まではほんの少しである。

いくぶんほっとした裕子は、手荷物をまとめ始めた。缶の入ったコンビニ二袋の口を結び、棚の上からポストンバッグを下ろすと、そのなかへ雑誌を入れた。

財布のなかの切符を確認し、到着までの時間を過ごした。

例によって駅到着の際にアナウンスが流れることはない。

電車の減速を感じた裕子は、そろそろ駅に到着することに気づき、荷物をもって乗降口へと向かった。

途端、空気は新鮮なものに変わり裕子は軽く深呼吸をした。

だが服や髪についた車内の臭いは消えることはなく、早くシャワーでも浴びようと裕子の気持ちを急かせた。

減速から停車へ。見慣れた駅のホームも人は疎らで、数えるほどの利用者が列ぶ程度だった。

駅に降り立った裕子は、エレベーターを利用し一階に下りると、改札口を抜けて駅前に出た。

閑散とした駅前にはタクシーは数台留まるのみである。

ふと空腹をおぼえたが、さっと冷凍庫のなかに保存してあるものを使い浮かべると、そのまま歩き出した。駅から自宅であるマンションまでは、徒歩十分弱の距離である。

寄るところがない限りは、歩いて帰ることにしていた。

近距離はドライバーによつては嫌がられる。場合によつては何時間も待機することがあると店の客に聞いていた裕子は、ポストンバッグを肩にかけ、片手にはハンドバッグを持ち、街路樹を歩き始めた。缶の入ったコンビニ二袋は、駅の空き缶入れに放り込んである。

だが身軽になったとはいえ、肩にかけたボストンバッグは数日分の着替えなども入っていて重い。

もう一度かけ直すと、歩を進めていった。

裕子の住むマンションは、丸居町というところにある。駅からも近いため、閑静な住宅地とは言えなかったが、それでもマンションの周りは数々の住宅やマンションで占められていた。

駅前から通じる大きな通りから一本入り、パン屋の角を曲がるとサンハイツというマンションがある。

三段ほどの階段からエントランスに入ると、郵便受けを確認し部屋へと向かった。

裕子の部屋は一階の左端、入ってすぐのところにある。部屋は全部で八部屋あり、二階建ての鉄筋作りである。

エレベーターはなく、二階へは裕子の住む部屋の横の階段を利用する仕組みとなっていた。

裕子はハンドバッグから鍵を取り出すと、開けようとして手を止めた。

コツコツと聞こえる足音の主は、隣に住む吉水だった。

Tシャツにジーンズ、髪は後ろににくくりという簡素な格好だが、口元のほくろが妖しい雰囲気醸し出している。

夜は近くの工場にて夜間のパートをしているとかで、日曜日に帰宅するとほぼ廊下で会うことが多い。

子供はまだ小さいようだが、マンション購入のために夜は旦那さんに子供を預け、実入りのいい夜間の仕事をしているとのことだった。吉水とは出先のスーパで会ったりするなど、よく挨拶を交わす仲である。

「こんばんは。今帰りですか？」

裕子はいつも通りの挨拶を吉水にかけた。

だが吉水は、

「ええ……」

とだけ言葉を返すと、そのままドアを開け部屋に入ってしまった。

普段ならば二言三言かわす会話はなく、裕子は戸惑った。

なにかあったのだろうか。そっけない吉水の態度に首をひねりながらも、裕子はドアを開けた。

隣からは起きていただろう子供の声が聞こえる。

隣との壁は比較的厚いものの、夜は響く。だが子供は寐されたのか騒ぐことはない。

ドアを開けた裕子は、壁のスイッチをまさぐった。

だが手応えはあったものの、玄関の電気がつくことはなかった。

「あれ？」

何度かスイッチを押したが、電気をつく気配はない。先日通帳を確認した限りでは、電気料金は引き落とされていたため、携帯を開くと液晶の明かりでブレーカーを確認した。

だがブレーカーは上がっていないかった。

電球が切れたのかもしれない。そう思った裕子は、ひとまず部屋に入ろうと歩を進めた。

そのとき、部屋履きがないことに気づいた。

「スリッパどこだっけ」

そのとき裕子は出かける前のことを思い出した。

本屋のバイトが終わったあと、老夫婦と長話をして慌てて帰宅して仕度をしてすぐ駅に向かったのである。廊下に履き捨てたのだろうと解釈した裕子は、携帯の液晶の明かりを頼りに廊下を進んだ。

向かって左側がトイレとバス、洗面台があり、右側に台所、奥に二間続きの洋室がある。

荷物を肩から下ろし、なかば引きずる形で廊下を進んだ裕子がドアを開けた瞬間、その先にある光景を見て驚きのあまり声が出なかった。

そこには、あるべき物の姿がなにもなかった。

ホームセンターで気に入って購入した白いソファを始め、テーブルやテレビ、棚や飾られた小物類まで見当たらない。

液晶の明かりでざっと見回し、そのまま奥の引き戸を開けたが、あ

るべきはずのベッドや衣装たんすまでもがきれいに消えていた。

「どういうことなの」

それだけを口にするのがやっとの裕子だったが、液晶の明かりだけでは心許ない。

ボストンバッグを床に置くと、壁のスイッチを押した。だが明かりがつくこともなく、自分の周りにぼんやり光があるだけだった。

居ても立ってもいられず、裕子は押し入れを開け、台所やバス、トイレを確認した。

だが、まるで貸し出す前の部屋のように、あるべき物はすべてそこにはなかった。

台所の流しには、出かける前に置いた食器類もなく、蛇口からも水が出る気配はない。

「なにこれ！泥棒！？」

悲鳴に近い声がなにもない部屋に響く。

こうしてはいられないと、裕子は警察に通報しようとするダイヤルを押しかけたとき、開け放されたままの玄関から声が聞こえた。

台所から出ると、そこには隣人の吉水の姿があった。「よっ…吉水さん！」

慌てて駆け寄ると、吉水は一步退き言葉を発した。

「なにがあったの？」

裕子はもどかしさに口がもつれながらも、この状況を伝えた。

一部始終を聞いた吉水は頷くと、「電話してくるから」と玄関から出て行った。裕子は吉水のそっけない態度に疑問を感じつつも、ありがたいと思った。

吉水に状況を伝えるのも一苦勞である。この状態では警察に伝えようにも上手く伝えられる自信がなかった。

再び一人になった玄関で、裕子は果然と立ち尽くしていた。

空き巣にしても、これはひどい。家のなかの物をねこそぎなんて犯行は聞いたこともない。

ましてや、流しに置いた食器類もねこそぎである。

衣装たんすにしても、持ち運ぶときに音がしなかったのだろうか？
何人かでの犯行であり、吉水ならばなにか手がかりを聞いたのかも
しれない。

そう思った裕子はミユールを履くと、廊下へ飛び出した。

その瞬間、なにかにぶつかる衝撃とともによるめきそうになった裕
子は、腕を捕まれていた。

そこから視線を移すと、その先には二階に住む青年の姿が映った。
タンクトップに短パン、そして短く刈り込んだ髪型に手には袋が掲
げられている。

「田崎さん！」

田崎と呼ばれた青年は、そつと手を離すと、玄関から部屋のなかを
覗き込んだ。「これは……」

そこまで言いかけた田崎の顔は、見る見る間に青ざめていった。

瞬間、田崎は裕子の腕を掴むと走り出そうとした。

「来るんだ！」

状況に思考がついていかない裕子は、とっさに腕を振りほどこうと
もがいた。

「ちよっ……いったいなんなの？」

だが田崎は、そう言う裕子の言葉に耳を傾けることはない。

「ここにいてはいけない！早く！」

なおも走り出そうとする田崎の力に逆らおうとした裕子は、ミユ
ールが脱げるのを目にした。

「なにするのよ！」

だが、田崎はそれに構うことなく、廊下をひた走り二階へと続く階
段を上がっていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7243m/>

箱庭

2010年10月15日07時57分発行